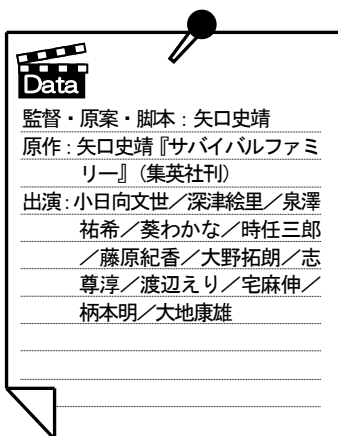




👁️👁️ みどころ

ある日突然、電気がすべてストップしたら・・・？2011年の3.11東日本大震災に伴うあんなにすごい福島第一原発爆発事故をテレビ画面上でリアルに目撃した日本人なら、そんな想定はまじめに考えるべきテーマ。それが遅ればせながら、半分コメディ的に半分リアルに・・・。

東京のとあるマンションに住む平成末期(?)の標準的な4人家族の、東京脱出の決断とその実行方法は？目指す先は・・・？その大変さは？

後半からクライマックスにかけての甘さ(?)とハッピーエンド的結末が少し不満だが、本作の「世界観」のあり方とその賛否についてしっかり議論したい。

———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— *

■ある日突然、電気がすべてストップ！その影響は？■

ある日、突然電気がすべてストップ！電灯、テレビ、冷蔵庫、電話はもちろんパソコンもスマホもアウト。すると電車はもちろん、電気系統がセットになっている自動車もダメ、ガス、水道もダメ。文明社会はありとあらゆるものが電気を不可欠としているわけだ。

2011年の3.11東日本大震災に伴う福島原発事故によって日本全体が節電を余儀なくされ、原発による電気供給の是非がはじめてまともな議論の対象になったが、ある日突然ワケのわからないまますべての電気がストップしたら大都市・東京は？そこで生活する人々の生活は？運命は？さらにラジオ、テレビ、電話、パソコン等によるすべての情報が遮断されてしまえば、本作のように「大阪は電気が通っているらしい」とのうわさを頼って大阪方面へ脱出したり、急遽キャンプ場を含む山の中での自給自足生活を目指したり、

各人、各家族の生きるための選択の在り方が至上のテーマになってくる。

しかして、東京に暮らす現代の典型的かつ平凡な鈴木家に見るサバイバルゲームとは？

■□■平成末期（？）の典型的な鈴木家の面々は？■□■

本作冒頭描かれるのは、東京のとあるマンションに暮らす、①冴えないお父さん・鈴木義之（小日向文世）、②天然のお母さん・鈴木光恵（深津絵里）、③ぶっきらぼうでマイペースな大学生の長男・鈴木賢司（泉澤祐希）、④スマホがすべてでわがまま盛りにある高校生の長女・鈴木結衣（葵わかな）、という4人家族の生活ぶり。団地に住む昭和全盛期の家族と違い、平成も終わりに近い（？）現在ではこれが最も標準的な4人家族の姿だ。

面白いのは、彼らが電気に頼り切った生活をあたり前にしていることへの対比（皮肉？）として、鹿児島で一人で暮らす光恵の父親・佐々木重臣（柄本明）から送られてくる魚や野菜をいかにも迷惑そうに示すこと。いくら立派な魚でも、それをさばく能力がなければ迷惑なだけ。また、いくら貴重な無農薬野菜でも、葉をめくると虫が飛び出してきたのでは気持ち悪いだけ。鈴木家では4人が4人ともある意味で貴重なそんな鹿児島からの贈り物に何の興味も示さず、今日もあわただしく各自の生活を終え明日のために眠りに付いたが、いつものように目覚ましが鳴らないという非常事態の中、少し遅れて目覚めると・・・？

テレビはダメ、ガスもダメ、トースターもダメ。こりゃかなり規模のデカイ停電のようだが、その原因は？そして解決は？朝食抜きくらいは我慢して外に出たがエレベーターがダメ。何とか駅に着いたが電車がダメ。停電は我が家、我がマンション、我が団地だけではなく東京一帯らしいが、その広がりはい体どこまで？会社も電灯はもちろんすべての電話とパソコンが動かないので仕事にならないため、「今日は暗くならないうちに早めに帰って下さい」とのこと。もちろん学校も授業なしで早めの帰宅に。まあ、原因不明の電気の供給ストップも1日くらいなら我慢できるが、これが何日も続けばえらいことに・・・。

■□■鈴木家の選択は？■□■

10階以上の高層マンションでのエレベーターなしの生活は、1～2日は我慢できても毎日になると・・・？日本ではかつて1973年（昭和48年）の石油ショックの際、トイレトペーパーの買いだめというパニックが起きたが、本作導入部で矢口史靖監督が提示する東京の水と食料品を中心とするパニック状態はなるほど、なるほどと納得できるものばかりだ。

マンションは民主主義の学校。それが都市問題をライフワークとする私の持論だが、本作における鈴木家が入居しているマンションでも、各人の生活のあり方と密接に結びつくマンション管理のあり方についての議論は面白い。鈴木家が住むマンションでは、一日ひとマンションを出ていく人が増えてきたし、孤独死する老人まで発生していた。また、義之の会社の同僚である高橋亮三（宅麻伸）は、いち早く家族とともに知り合いのキャンプ

場の近くへの「疎開」を決めたからすごい。そんな状況下、鈴木家はいつまでマンションに留まるの？逆に疎開するならおじいちゃんが住む鹿児島島があるが、いくら何でも東京から鹿児島は遠すぎる？さあ、鈴木家の？そして一家の長たる義之の選択は？

■飛行機がダメなら自転車で？そんな無茶な！■

日本が太平洋戦争に突入したのは、一方で過去の成功体験に縛られ、他方で将来に向けて都合のいいデータばかりを採用したためだ。義之が自転車で羽田空港まで行き、飛行機で鹿児島のおじいちゃんの家「疎開」として決めたのは、それと同じ誤りを映している。そもそも、東京都内の電車がすべて止まっているのに、飛行機は飛んでいるという発想はどこからくるの？父親のとした選択に天然の母親が従うのは仕方ないとしても、大学生になっている長男・賢司はもう少ししっかり事態を把握し、修正意見を述べる必要があるのでは？また、長女の結衣が父親の選択に文句ばかり言っているのは、まだわがまま盛りの高校生だから仕方ないとしても、少しは世の中のしくみを学ぶ必要があるのでは・・・？

案の定、自転車を漕いでやっとたどりついた羽田空港は大混乱で、飛行機の運転はなし！そこで義之は「飛行機がダメなら自転車があるさ」という決断を下したが、そんな無茶な！本屋に入って地図を買った（タダでもらった）が、自転車で東京から鹿児島まで一体何日かかるの？その間の水、食料、その他必需品の補給は？「先の大戦」における、南の島々で補給路を断たれた日本の将兵たちの苦労を義之たちは知らないの？

■自転車で東京脱出劇から見てきたものは・・・？■

鈴木家にとって自転車で東京脱出劇はじめてのことだから、すべてが試行錯誤の連続になるのは仕方ない。まずは大阪への道を進みはじめたが、大雑把な地図だけでは道に迷ったのも仕方ない。しかし、目の前の現実を見れば従来の固定観念と違う発想が生まれるのが常で、そこで光恵が思いついたのが高速道路を走ること。車は1台も動いていないのだから高速道路はタダで使い放題だし、当然自転車は走りやすく、大阪への道も一本道。なるほどこりゃベストの選択だ。しかし、係員のいない料金所をフリーパスで高速道路に入り、大阪方面へと自転車を走り始めた鈴木家の面々が見た風景に注目！この風景を見ると、なるほど昭和の時代に同じような教育を受け、一億中流といわれた日本人が考えることはみんな同じだということがよくわかる。

さらに、本作中盤以降の鈴木家の東京からの脱出劇の中で、矢口史靖監督が提示するいくつかのエピソードが面白い。米屋を経営する女・古田富子（渡辺えり）が水と食料なら米と交換するが、ロレックスやマセラティはもちろん、ブランドものの各種では絶対お米と交換しないと宣言する姿に納得！また、もともとアウトドアが趣味の斎藤一家はこれ幸いとばかりに、斎藤敏夫（時任三郎）、斎藤静子（藤原紀香）、斎藤涼介（大野拓朗）、斎藤翔平（志尊淳）の4人が水や食料を自給自足しながら高速道路を自転車で走り楽しんでい

るのも面白い。また、太平洋戦争中でも都会に比べれば田舎はまだ楽だったが、平成の今それを具体的に示すのが、養豚業を営む強面の男・田中善一（大地康雄）の生活ぶりだ。

水も食料も尽きかけた今、一匹の豚を目の前に発見したのはラッキー。もっとも、その豚を捕まえることに成功したものの、それを食べるにはどうすればいいの？そんな困惑状態の鈴木一家を見つけて「コラ！」と怒鳴りつけ、その目の前で豚を殺し、家まで運び込ませた男は一見強面だが実はやさしい男だった。養豚場を一人で営む老人には助手が欲しい。他方、鈴木家は食べるものと寝るところが与えられれば今や極楽。そんなニーズが合致したから、本作中盤で鈴木家にはこれからこの田中の養豚場で働くという新たな選択肢が発生したが・・・。

■□■矢口流の「ひねり」はイマイチ・・・？■□■

私は『スウィングガールズ』（04年）を観て（『シネマルーム4』320頁参照）はじめて矢口史靖監督の名前を知り、『ロボジー』（12年）での発想力の豊かさと面白さを感じた（『シネマルーム28』239頁参照）。しかし、『WOOD JOB！～神去（かむさり）なあなあ日常～』（14年）はイマイチだった（『シネマルーム32』未掲載）。オリジナル脚本こだわる矢口史靖監督作品は、良くも悪くも企画力や発想力がポイントだが、本作に見る「もし電気がなくなったら・・・」という企画、発想は面白い。しかし、そのテーマはあまりに広いから、どんなアプローチで2時間の映画にまとめるかが勝負になる。本作の脚本はきわめてシンプルなうえ、プレスシートの中で矢口監督が「ドキュメンタリー作品のようにしたかった」と述べているように、『奇跡の2000マイル』（13年）（『シネマルーム36』未掲載）や『わたしに会うまでの1600キロ』（14年）（『シネマルーム36』197頁参照）と同じようなドキュメンタリータッチのサバイバル・ロードムービーになっている。

本作の最大の特徴は、今の時代の標準的な家族4人を主人公に据えたうえで、ある日突然電気が消えたら、という仮説の中で起こる現実を、それぞれの目線から描いていること。しかし、それは逆に本作が想定どおりの事態を次々と見せていくことにつながるため、どうしても意外性やひねりに乏しくなってしまう。つまり意外性とひねりが満載だった『ロボジー』の逆になるわけだ。

そんな本作後半のエピソード（クライマックス？）として見せるのがイカダで川を渡るシーンだが、さてその出来は？結衣がつけまつ毛に固執しているのと同じように、義之が固執していたのはかつら（男性用のウィッグ）。食物や自転車をイカダに積んで川を渡ろうとしたが雨が降り始めて増水し、川の流が早くなる中、無情にも義之は水の中に消え、賢司が拾ってきたのは取り残された義之のウィッグだけ……。そんな思いがけない事態にそれまで文句ばかり言っていた結衣も涙ぐみ、自転車を失った3人の徒歩での鹿児島行きは一層困難を極めることになったが、さてその中盤でのヒネリは？意外な展開は・・・？

これ以降の本作の展開は私には若干手抜き、あるいはアイデア不足と言わざるをえないが、さてあなたの評価は・・・？

■□■鹿児島での生活は？新たな東京での生活は？■□■

人間はどんなところでも生きていく対応力、順応力があるのが最大の特徴。鹿児島にたどりつき、重臣の下で漁をする義之、光恵、はたを織っている結衣の生活ぶりを観ているとそんな実感が強くなる。すべての電灯が消えた東京で、マンションのベランダから見た星空もきれいだったが、鹿児島では一切の電気が使えなくても十分生活できるようだからすごい。これはある意味まちづくりをライフワークとしている私にとっても興味あるテーマだが、本作のラストはそういうハッピーエンドではなく、ある日突然電気が復旧するところが良くも悪くもミソだ。

一時は世界同時多発テロが原因？と疑われたものの、2年数カ月を経て電気が以前と同じように復旧すると、その原因究明の課題は残しつつ、東京のまちや機能もすべてが昔のように・・・？なぜ義之の会社がそのまま続いているのかは不明だが、本作ではそんなことはどうでもいい。とにかく、あのマンションに戻った鈴木家の4人の生活が昔のままというのがポイントで面白い。変わったのは魚のさばき方がうまくなったことくらいだが、鈴木家は、また東京都民はホントにこれでいいの？矢口監督は大テーマを大上段に振りかざしながら、なぜ本作をこんなハッピーエンド(?)にしたの？そこらあたりは、映画を鑑賞したすべての人の判断に委ねたかったのかもしれないが、私としては矢口監督の視点を明確に示して欲しかったと思うのだが・・・。

2016（平成28）年12月21日記